



WIENER PHILHARMONIKER
Live Recording Edition 22

CD 1

ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven 1770- 1827

プロメテウスの創造物 Op. 43 - 序曲

2CD

- [1] **Die Geschöpfe des Prometheus** Op. 43: Overture 5:57

ブラームス

Johannes Brahms 1833- 1897

ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲 イ短調 Op. 102

Double Concerto for Violin and Cello in A minor, Op. 102

Das Doppelkonzert a-Moll für Violine, Violoncello und Orchester Op. 102

- [2] I. Allegro 17:39 ヴァイオリン: ライナー・キュッヘル
[3] II. Andante 8:08 チェロ: ロベルト・シャイヴァイン
[4] III. Vivace non troppo 9:22 Vn: Rainer Küchl / Vc: Robert Scheiwein

ドヴォルザーク

Antonín Dvořák 1841- 1904

交響曲第9番 ホ短調「新世界より」Op. 95

Symphony No. 9 in E minor, Op. 95, B. 178, "From the New World"

- [1] I. Adagio - Allegro molto 9:21
[2] II. Largo 13:09
[3] III. Molto vivace 7:49
[4] IV. Allegro con fuoco 11:18

ヴェルディ

Giuseppe Verdi 1813- 1901

歌劇「運命の力」序曲 (アンコール)

- [5] **La forza del destino**: Overture (Encore) 7:50

リッカルド・ムーティ (指揮)

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

Riccardo Muti

WIENER PHILHARMONIKER

1975年4月3日: NHKホール ライヴ録音 Live: 3.4. 1975 Tokyo, NHK Hall

ヘツェルの入団秘話

紺戸 淳

指揮者と演奏者との関係から見て、今日「どんな無理な要求でも、全部完璧に演奏して見せますよ」というスタンスをとるオーケストラがほとんどという中で、ウィーン・フィルは過去から今日に至るまで、指揮者向けの「自分たちは音楽をこうしたい」という欲求の圧倒的に強いオーケストラである。コンサートマスターのキュッヒルが、あるインタビューでの「良い指揮者とは?」という質問に対し、「私たちの音楽を邪魔しない指揮者」と言い放ったエピソードは、このオーケストラの性格を端的に余すことなく語っている。多少の誇張もあるだろうが、実際ウィーン・フィルの団員の大部分は、「指揮者には従うもの」とはまったく考えていないらしい。ひどい人に言わせると、「指揮者は仕事を時間どおりに終わらせるための整理人」だそうである。つまり、音楽をやっているのは自分たちの方だと。では、この主張はいったい誰が指揮者に告げるのだろうか？ 実は、これこそがコンサートマスターの仕事にほかならない。代々のコンサートマスターは、オーケストラを代表してウィーン・フィルがウィーン・フィルであるための主張を、日ごと夜ごと全身で壇上の指揮者にぶつけてきたのである。

ウィーン・フィルの名コンサートマスターとして今もって語り継がれるゲアハルト・ヘツェルが、山の事故で帰らぬ人となったのは、1992年の夏のことであった。このヘツェルがウィーンに登場することとなった背景は、その後の名声に比べて世に余り知られてはいない。

ウィーン・フィルは第二次世界大戦後、長いことコンサートマスター不足に悩まされ続けてきた。シュナイダーハンは早々に退団、バリリは右腕の疾患による演奏制限、セドラックは気づいたら70歳に近い高齢、ひとり残ったボスコフスキーは、いやでも孤軍奮闘を強いられオーバーワーク寸前にまでなる。何としてもウィーンに育った生粋のコンサートマスターが欲しい！それは当時のウィーン・フィルの執念でもあった。

そして、そして待ちに待った若き星、ウェラーの登場。これで自分たちの将来は永く安泰、と誰もが安堵の胸をなでおろしたのも束の間、何んと当のウェラーがその重責に耐えかねて、わずか30歳でリタイアしてしまった。関係者は誰もが皆、目の前が真っ暗になったことであろう。自分たちの音楽的主張を代表してくれるコンサートマスターは、もうこの世には現れないのか？

そこへベームがヘッツェルを紹介してきた。1969年のことである。ヘッツェルはシュナイダーハンの薫陶をスイスのルツェルンで受け、1961年のミュンヘン・コンクール第3位に輝く経歴を持っていたが、ユーゴスラヴィア生まれで前任はベルリン放送交響楽団のコンサートマスターであったなど、当時ウィーンでは、とてもではないが自分たちの仲間のヴァイオリニストとは見なされていなかったらしい。加えてベームのそれが、紹介とは名ばかりのかなり強引な押し込みだったことも手伝い、ヘッツェルへの反発はかなり広がった。今度のコンサートマスター候補に、われわれの音楽的主張を代表する資格があるのか？そして、指揮者と対峙するだけのウィーンの音楽的資質を持ち合わせているのか？というわけである。ウィーン出身でないコンサートマスターを受け入れることは、自分たちに脈々と受け継がれてきた音楽的アイデンティティを失うことにつながりかねない。この迷いは多くの団員の動揺を招いたに違いない。しかしながら、紆余曲折はあったものの、1969年10月に（どうやら試用期間はなしで）ヘッツェルはウィーン・フィルのコンサートマスターに就任したのである。

後日、ウィーンにて筆者にこのような話を伝えてくれた関係者がいた。

「ヘッツェルがやってきたときは、そりゃヒドかった。現状だけで考えたら間違いなく使えなかったよ。でも俺たちはヤツの今ではなく“将来”を買ったんだ。こりゃ鍛えりゃモノになるとね。ところが入れて見たら、その途端にバリリもシヴォー（ウェラーと同時にコンサートマスターに就任したヴァイオリニスト）もやめちまって、本人もそりゃアワ食ったんだろうね。目の色を変えて練習を始めた。そしてこれと前後して、俺たちが鍛え役を買おうと、ヒューブナーとシュトレンク（ともに長老といえるような、当時の第2ヴァイオリン—のちに楽団長—とヴィオラのソロ奏者）が自分たちの室内アンサンブ

ルにヘツツェルを引っ張り込んだんだ。基礎から徹底的にやった。そしたらよっぽど厳しかったのか、3年でモノになったね。」

また筆者は、この室内アンサンブルが70年代前半に来日したとき、その演奏会直前のゲネプロ（総合練習）に実際に立ち会った人から、次のような話を聞かされたことがある。

「会場に入ったら、あと数時間で本番だというのに何んと若いチェロ奏者がひとりでロングトーン（左手は弦を押さえず、弓を持った右手だけで長い音の発音練習をすること）をさせられていて、楽器を床に置いたヒューブナーとシュトレングが、2人して苦虫を噛み潰したような顔で「Nicht ... nicht!（だめ、だめ!）」と言っているんだよ。本番直前だよ。ヘツツェルは、息を呑んだまま前かがみになってピクリとも動かない。ありゃその前に同じことさせられていたんじゃないのかなあ。」

恐らくヘツツェルの鍛え役を買って出た団員は、この2人だけではあるまい。ウィーンの音楽的アイデンティティの行方に危機感を募らせ、同時にヘツツェルの将来にそれを賭けた人々の逸話は、いくつも伝承されている。

「コンサートマスターを鍛える!」本当たししたら（筆者は多分本当たと思っている。）ウィーン・フィルの教育システムは、いかなるメソッドにも負けない世界随一のものであるといえるだろう。

こうしてヘツツェルは、数年の間に急速な成長を遂げ、70年代の中頃にはみごとウィーンの音楽的主張を代表する、押しも押されもせぬ名コンサートマスターへと変貌していったのである。

このCDにおいて聴けるムーティとの演奏会は、1992年6月。当日を担当したコンサートマスターが誰であったのか、正確な記録は詳らかでない。しかし、その後の運命を知らないヘツツェルが、最後の光芒を放っていた時期にあたる。

そのヘツツェルが突然にいなくなった。そうしたら、今度はキュッヒルとヒンク（ともにコンサートマスター）の目の色が急に変わったそうである。ヘツツェルは、自身が周囲に鍛え上げられたことで、ウィーン・フィルのコンサートマスターのあり方を、今一度はっきりと示したといえるのではないだろうか。

ムーティとウィーン・フィル

ウィーン・フィルの1975年来日公演といえば、我が国の音楽ファンの間にあっては、古典、ロマン派音楽の権化とされていたベーム指揮によるNHKホールでの一連のコンサートが、伝説として語られてきた。NHKにより収録された音源が早くからレコード化され、繰返し発売されてきたこともそれを促した面があるだろう。

この来日公演にベームと同行し、既に80歳と高齢のベームに代わって日本各地での公演を主に担ったのが、当時弱冠34歳であったリッカルド・ムーティであった。

ムーティは、1972年にはフィラデルフィア管弦楽団、ニュー・フィルハーモニア管弦楽団、ベルリン・フィル、そしてザルツブルグ音楽祭ではウィーン・フィルへと、更に翌73年にはウィーン国立歌劇場（《アイダ》）、シカゴ交響楽団、そしてボストン交響楽団へといった具合に、続々と名門にデビューし、その若き格別の才能は急速に世界の楽壇に認知されつつあった。しかし、今以上にレコードを通じてという「管見」を強いられていた当時の我が国において、ムーティについては、73年にニュー・フィルハーモニア管弦楽団の常任指揮者に就任したことが報じられ、カバリエ、ドミンゴ、コッソット、ギャウロフといった名歌手を擁して今なお古典的名盤とされている

る《アイダ》がデビュー盤として紹介されていた程度であった。

しかし、「王達の民主制」と呼ばれる自主自律の運営の下で、「最高のディレクタント集団」として、自らの指揮台に迎える者の目利きにかけては最も辛辣な判断者でもあるウィーン・フィルが、ムーティという格別の若き才能をどのように遇していたのかは、ここに何よりも「音」として如実に刻み込まれていたということになる。

リッカルド・ムーティ

1941年、ナポリに生を享ける。生地の音楽院でピアノを、次いでミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ音楽院で作曲と指揮を修める。

1967年、グイド・カンテルリ国際指揮者コンクール優勝。翌年、フィレンツェ五月音楽祭管弦楽団首席指揮者に就任。71年カラヤンによってザルツブルク音楽祭に招かれ《ドン・パスクワーレ》を指揮。これがウィーン・フィルと初の共演となる。

1973年には、クレンペラーの跡を襲って、ニュー・フィルハーモニア管弦楽団主席指揮者、80年には、ムーティの才に惚れ込んだオーマンディ自らの肝煎りで、フィラデルフィア管弦楽団音楽監督となり、コンサート形式によるオペラ公演など、ムーティならではの新機軸で好評を得る。

1990年代以降、ウィーン・フィルと「事実上の首席指揮者」としての密接な関係を維持

しながら、1986年から2005年の間は、ミラノ・スカラ座の音楽監督として、そのアンサンブルのレベルを引き上げたと評価される歴史的な業績を遺した。

その後、2010年よりシカゴ交響楽団音楽監督に就任し現在に至っており、ムーティ/シカゴ響の録音第一弾となった圧倒的なヴェルディ《レクイエム》は、第53回グラミー賞で年間最優秀クラシックアルバムに選出された。

他方で、2004年以来、若手音楽家の育成を目的として、ラヴェンナ音楽祭を基盤の一つとして自らケルビーニ管弦楽団を組織し、指導に当たっている。

ライナー・キュッヒル

1950年、下オーストリア州、ヴァルトホーフェン/イプス生まれ、ウィーン・フィルのヴァイオリニストの多くを育てた名教師F・サモヒル門下。

1971年、国立歌劇場管入団と同時に、通常は数年を経て認められるフィルハーモニー、更に名誉ある宮廷楽団（ホーフ・ムジーク・カペレ）奏者にも任じられる。

とくに、1992年に起きたゲルハルト・ヘッツェルの不慮の事故死以後は、変革期のウィーン・フィルを第1コンサートマスターとして名実共に率いてきた。

また、ソリストとしての活動の他、キュッヒル四重奏団、H・コル、W・シュルツ、P・シュミードル、G・ヘーグナーといった同僚中の

名手達とウィーン・リング・アンサンブルを結成しての活動で、わが国の聴衆にもとくに馴染み深い。

ロベルト・シャイヴァイン

1935年、ウィーン生まれ。F・リッチャウアー門下。フォルクスオーパー管を経て、1960年に国立歌劇場管入団。1962年、フィルハーモニー団員となり、1966年からは宮廷楽団奏者にも任じられる。

近年までウィーン・フィルの顔の一人として活躍したF・バルトロメイと、その師であるエマヌエル・ブラベッツを繋ぐ世代として、長年、首席奏者としてウィーン・フィルの屋台骨を支えるとともに、ウェラー四重奏団のメンバーとして室内楽の分野でも活躍した。1997年退団。惜しくも2011年に亡くなった。

限られたソリストしか招かないウィーン・フィルにおいては、首席奏者達による協奏曲は一種の伝統だが、東京、大阪、そしてウィーンで、キュッヒルとともにムーティの指揮で演奏した、この75年のブラームスは、シャイヴァインのキャリアにおいて忘れ難い印象を与えるハイライトであったと、彼の訃を伝える同フィル公式サイトに特筆されている。

（河原 融）